
眠り姫

白峰 調

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠り姫

【Nコード】

N1875D

【作者名】

白峰 調

【あらすじ】

図書室の童話の棚の前で眠る少女と、ひそかに憧れる少女。誰もいないはずの図書室で、眠る彼女にキスをしてしまった若葉は……。

第1章

私たちは彼女を眠り姫と呼んでいた。理由は昼休みになればすぐにわかる。図書館の奥にある、童話の棚の前におかれたソファでぐっすりと眠る彼女を見れば。

どうして眠るのかはつきり知る人はいない。噂では病気があって定期的に睡眠をとらないと意識を失って怪我をする可能性があるからだと聞いた。

だが、彼女の幸せそうな寝顔をみればそんなことはどうでもいい。どこかクラスで浮いていて友人もない彼女が邪険にされずむしろ愛されているのは、人当たりがいいからだけではなくその寝顔の美しさのおかげかもしれない。

私、木野内若葉もひそかに憧れを抱くひとりだった。

「あ、もうお昼過ぎてる」

空き教室の窓からみえた時計はもう十二時を半分以上過ぎていた。ついではばかりに近寄って髪を整えた。肩より少し長い黒髪はどっちつかずで、目下伸ばすか切るかを悩んでいる。

学習時間の確保の名目でうちのような中途半端な私立中学校でも始められた土曜登校は、大学生の兄が懐かしいと口にするような半ドンだった。

図書委員の私は先ほどの授業でつかった本の返却を頼まれて、わざわざ職員室に鍵を借りてから放課後図書室へとやってきたのだった。

扉を開けて、学校の規模にしては立派な図書室を見渡す。南窓のある部屋の左手からは秋らしい柔らかな陽が差し込んでいる。かび臭い空気が流れたしてきた。

いつもと違う姿の部屋に少し気後れを感じながら、返却棚へと歩いていく。足音がひどく響いた。

本をどさりと無造作においてすぐに帰ろうとする。

けれど、

「すう……すう……」

聞こえるはずのない音が聞こえた。寝息だ。

私は手に握られている鍵をみた。特別教室の鍵は職員室にしまわれていて、委員会などの特別な仕事があれば貸し出しはされない。規則正しく、気持ち良さそうな小さな寝息。

もしかして。私は足音を忍ばせて部屋の奥に歩いていく。

みつつほど棚を通り過ぎて、その向こうには童話の棚がある。壁際のそこは日が差して冬に暖かく、夏は影になって涼しい隠れスポットになっている。けれど昼休みそこには誰も訪れてはいけない。許されるのはそっと覗くことだけ。

「いた……」

ソファの上ですやすやと眠る女の子。同じ組にいるのにあまり話したことはないが、学校でもかなりの有名人であるその子、名前はひいらぎなみ柊那美。

腰まである柔らかかそうな栗色の髪の毛をソファの上に流し、彼女は愛用のクッションをまくらにして横向きに寝ていた。

普段なら他の生徒の目があつて近寄ることなんてできないが、この状況が私に思い切った行動をとらせた。一度でいいから近くで寝顔が見たかったのだ。

しのび足で近づいて、顔を覗き込む。

どうしてこの子は図書室に入れたんだろう。何気なく手を伸ばして頬に触れてみた。

「あつ」

瞬時に手がつかまれる。起こしちゃったかと思ったが、彼女は私の手をしっかりとつかんだままゆるゆると眠り続けていた。ひっぱつても、手を解こうとしてもうまくいかない。これ以上強くやったら起こしてしまうだろう。

「やれやれ」

無理に起こすのも気が引けて、私は手を握られたまま彼女が眠るソファの端っこに腰掛けた。どうせすぐに起きるだろう。彼女はいつも昼休みの30分できっちり教室に戻っているのだ。

なにもすることがなくて、彼女をじっくり観察してみる。その頬は差し込む太陽のせいではんの上気していて、赤ん坊のような幸福な笑みをわずかにのぞかせている。呼吸のたびに紺のブレザーに覆われた華奢な肩がゆるやかに上下して、すうという息が手にかかる。スカートから伸びて白い靴下に包まれた足は女の私でも可憐と表現したくなる細さだ。

これではまるで。

「本当にお姫様みたい」

あいている左手で髪に触れた。柔らかい。春先、公園の隅に雨のあと伸びた鮮やかな若草を思い出させるような心地よさだった。ついついそのまま撫で続ける。

こんなに可愛いお人形なら、おもちゃに見向きしなくなった今でもほしいくらいだ。鼻先にふっと甘い香りがかかった。

おかしいことだなんて、そのときの私は気づかなかった。

私は髪の毛にキスをした。慈しむように何度も何度も。

ぞくぞくと、背筋に電気が流れる。まだぐっすりと眠っている彼女。

私は彼女の頬に息を詰めて近づく。キスをする。

まだ目が覚める様子はない。心臓は痛みを訴えるほど激しく動いている。

ゆっくり、彼女の口へとかがみこむ。

寝息が私の口元をくすぐる。

とうとう、私はその小さな唇に唇を重ねた。

ぱちり。

目が開く。ぱちぱちと瞬きをする。

つばらな瞳が左、右、上、下、と動く。

そしてにこおという感じで細められた。いたずら小僧が何かを思いついたときみたいに。

まだ唇を離していない私。すっかり硬直していた。

その下で彼女の唇が動く。もぞもぞと開き、閉じる感触。

「抱きまくら、みつけた」

私はあのお話をすっかり忘れていた。

『紡錘^{つむ}に刺されて百年の眠りについた眠り姫は、王子様のキスで目をさましたのです』

第2章

「ねえ、どうやって仲良くなったの」

「どうして若葉にだけあんなに親しそうなの」

月曜日から私は那美の親友となっていた。

あのあと何も言わずに図書室から走って逃げ出し、鍵を職員室に返すと、大急ぎで家に帰って自分の部屋の布団をかぶって震えていた。

もう、おしまいだ。女に、しかもファンの多い彼女にキスをしたとなったら、私にどんな仕打ちが待っているだろう。変態扱いされて総スカンぐらいは覚悟しなければならない。

悩みすぎてろくに眠れず、月曜の朝には目の下にくまができていた。

しかし、体をひきずるようにして登校し、勇気をふりしぼって教室に入ると、にこにここと笑う那美が真っ先に「おはよう、若葉」と声をかけてきた。

ぎしりと体が固まって、言葉が出なくなる。

「おはよう、どうしたの」

もう一度繰り返した言葉は、言外に脅迫めいたものが込められていた。日本語にすると「分かっているだろうな、お前」だ。

「おはようございま……」

視線がきつと鋭くなる。

「おはよう……柊さん」

これを聞いてまた笑みを浮かべると、手を振りながら自分の席に帰っていった。

それからは休み時間の度に女友達に囲まれることとなった。その後ろでは、気になってしょうがない男子達がちらちらとこちらを眺めている。

「あの、昨日帰り道にちょっと」

できるだけ図書室とは関係のなさそうな言葉をえらんでごまかそうとしたが、質問したくせに今の彼女たちは話を聞く耳なんて持たなかった。てんでばらばらに羨ましいの合唱。本当にここまで人気があるとは、冷や汗をかきながら縮こまる。

「授業はじまるぞ、席につきなさい」

先生のこの声こそが唯一の救いだった。

昼食を食べたら、長い長い昼休みが始まる。

普段なら楽しみなそれがこの日は憂鬱でしかたがない。これまでと同様、あっさりクラスメート達に囲まれて、私の30分間は拷問に決定したように思われた。

しかし、

「ちよつと若葉を借りてもいい」

やわらかいが、有無を言わせない声が響く。

囲みはざわめいて自然に道をあけた。そこにはクッションを抱えた眠り姫が、すこぶる上機嫌そうに私をみつめていた。

「こつちよ」

私の手を握り、すいすいと歩いてゆく。時間の無駄といわんばかりに説明のひとつもなく、私はなされるがままにひっぱられていく。「あの、どうして私に構うの」

返事はない。ずんずんと進むこの通路は私にも馴染みの道で、たどり着く場所はひとつしかなかった。

図書室の扉がみえた。

クッションを私に押し付けて、空いた右手で扉を開くとまた何も言わずどんどん進む。

知り合いの図書委員が貸し出しカウンターの途中で目をまん丸にしてこちらをみていた。

ひとつ、ふたつ、みつつ目の棚、その奥。

「こつちよ」

眠り姫の寢所に、私は通された。

彼女はソファの真ん中に座ると、その右隣の席をぽんぽんと軽く叩いた。

意味が分からず立ち尽くしていると、またきつとなつて睨みつけてくる。

「若葉はここに座るようにいつているの」

おずおずと言われたとおり腰を下ろす。3人掛けのソファなのでわずかに肩が触れてしまい、また体をひきつらせることになった。

座る私を満足そうに眺めて、彼女は私の膝にクッションを置いた。「よつと」

靴を脱ぎ捨てると頭を膝の上のクッションにあずけて、私のお腹に腕をまわすようにして横になる。

「ひ、柊さんなにをするの」

顔を上げて再び厳しい視線を至近距離から投げってくる。

「質問はあとで。那美と呼んで。眠りの時間をじゃまするやつは許さない」

目をつぶってクッションに頭を据えなおしてから、言った。

「もしも起こしたら、ばらすわよ」

抱きまくらみつけたの聲が頭の中でリフレインする。呆然と、私は30分間座っていた。すやすやと眠る彼女をみつめながら。

第3章

つぎの日になるとクラスの質問攻勢はすっかり止んでいた。まくらとなつた私を誰かが触れ回ったようだ。そして彼らが出した結論は「この二人を邪魔するべからず」だった。

いままでだれとも仲良くしなかった姫を、ここまで手懐けた唯一の人として特別視されてしまったらしい。傍から見たらこれほどの仲良しはそうあるまい。

他クラスの好奇心の強い女子などはよく訪ねてくるのだが、そのたびに那美がやってきて笑顔で追い払ってしまう。

予想をはるかに裏切る形で、静かな日常が進行している。

4日目の木曜日にもなると、私のほうでも冷静に状況をつかめるようになっていた。

図書室のソファで、この子が私のひざで眠っている間は秘密がばらされることはないだろう。それならば、ほんのすこし役得を味わうくらいは構わないはずだ。

そつと長い髪に触ってみた。ふわふわした髪の色は、日に焼けてちよつとした色の变化があるのをみるに、染色などは一切していない生まれつきの栗色だろう。

「ううん」

驚いて顔を見ると、親猫に毛づくろいをされている子猫のようなくすぐったそうな笑みが浮かんでいる。

もうすこし触ってもいいよね。手ぐしで髪をすいたり、頭を撫でたりをゆっくりゆっくり繰り返す。あいかわらず気持ち良さそうな顔。

そんなことをしていると30分はすぐに過ぎた。予鈴とともにぱちりと目を開けて、起き上がるとぐつと伸びをする。寝覚めはすこぶるいいのだ。

普段なら何も言わず私をひっぱってさつさと教室にもどるのだが、

今日は違った。

「いい夢をみたわ」

「どんな夢？」

ちらりと私の手を見やる。

「これからも、髪が痛まないくらいならいいわよ」

そう言ってさっさと部屋から出ていく。

顔がすごく熱い。どんな顔をして教室に入ればいいんだろう。

土曜日になっても彼女は私をひきずって図書館へと突き進む。

「今日は鍵閉まってるってば」

そういえばこの間はどやって入ったんだ。

扉の前までくると、ポケットから何かを取り出した。鍵だ。

よく見慣れた図書室の鍵と同じものが手に握られている。

「どやって手に入れたのよ、それ」

「あとで教える」

内側から鍵を閉めると、今日も同じようにソファへと連れてゆかれ、まぐらの私の上で彼女は眠るのだ。

目を閉じてから、彼女がぽつりとつぶやいた。

「撫でて、この前みたいに」

ほんのりと染めた頬。きのう寝起きの機嫌がわるかったのはもしかして。

なんだかとても幸せな気持ちで、私はずっと髪を撫でていた。

「じゃあ病気なんてないの！」

「そうよ」

一緒に帰ると言い出した彼女にこれまでの疑問をぶつけてみると、驚くほどあっさり答えてくれた。

「どうして寝るの」

「眠いから」

あまりにシンプルな答えに何も言えなくなる。

「入学してすぐにあの場所を見つけたの。そのソファでお昼寝を
してただけなのに変な噂が立って」

気持ちはなんとなく分かる。毎日あんなところで美少女が眠って
いたら、不思議な事情があるに違いないと想像してしまうだろう。

「鍵は」

「病気を真に受けた先生方に、最初は保健室で寝るようすすめられ
たの。薬臭いから嫌だといったら条件つきのないしょで」

学校の警備がとても不安になったが、さらに興味がわいた。

「条件って」

「悪用しないこと、それとないしょ」

「えー」

それきり彼女はどんなに尋ねても教えてくれなかった。その話は
おしまいになって、かわりにいろんな話をした。彼女はファッショ
ンや芸能人にすごく明るくて、私は図書室で彼女が見向きもしなか
った本たちやクラスのみんなのことを話した。彼女は驚くほどクラ
スメートのことを知らなかった。

「もしかして芸能界とか好きなの」

「いいえ」

じゃあなんで詳しいのだろうと不思議に思ったが、彼女の苦い表
情を見て何も言わなかった。

「じゃあ私の家ここだから」

「また明日ね、若葉」

玄関に入ってから明日が日曜日だと気づいて、彼女の言い間違い
にくすりとした。ここまで一緒に来たけど家は近所なのだろうか、と
ちよっと浮かれた気持ちで階段を登った。

第4章

「若葉、お友達がきてるよ」

日曜日にとくにすることもなく、ベッドに横たわってバーネットの「秘密の花園」をぱらぱらとめくっていると母親の声がした。

「はい」

今日は誰とも約束なんてないのにと考えた瞬間、ぱっと頭に浮かぶものがあつた。

『また明日ね』

私はばね仕掛けのように起き上がると階段を一段抜かしで駆け下りた。

「こんにちは、若葉ちゃん」

玄関にはよそ行きの顔で微笑む那美の姿があつた。

私の部屋に案内すると、彼女は興味しんしんとあたりを見回していた。

「わあ、本棚に本ぎっしり。さすが読書家ね」

「どうして来たの」

彼女は嬉しそうな顔で、手提げの大きめのバッグから愛用のクッションを取り出す。

「お昼寝に」

予想はしたけど、まさか本当にそんなことで。

「ねえ、ベッド使ってもいい」

そういつて私のベッドの使い心地を押したり叩いたりして確かめる。

「早くここに座って、もうすぐお昼寝の時間なんだから」

ため息をついて、私はベッドの端に腰かけた。寝床を整える彼女の髪が挟まることのないよう、甲斐甲斐しくお世話をしていた。

「休日にいきなりおしかけて、迷惑だった？」

いつもよりちょっとだけ気弱そうな声で尋ねてくる。

「うつん、予定はなかったから」

そう答えると彼女はまわした腕にぎゅっと力を込めた。

実をいうとちょっと嬉しかった。図書委員の仕事のたびこっそり寝顔を覗いていた頃からは考えられないほど、私は彼女の特別な存在になっている。こんなふうに信頼されて、触れることもできる。

「でも、どうして人をまくらにするの」

子猫なら甘えてのどを鳴らしそうな表情で私のお腹にしがみついている彼女。

「私ね、まくらにするなら女の子だと思っていたのよ」

「はあ」

質問とは微妙にちがう答えに、まぬけな声を返してしまった。

「だって男の子ってごつくて固いし、髪を撫でるにも乱暴だったり、ひっかけたりしそうじゃない。そんな風に思っていたところにあんなことしてる人を見つけたのよ」

キスのことは特に気にしていないように思えてちよっと拍子抜けしたような気持ちになる。眠れなくなるほど悩んでいたのは、私だけだったのか。

「当たりだったわ。だって若葉は柔らかいし、あたたかいし、いい匂いがするし、すごく優しく撫でてるんだもの」

そんなことを聞くとどうしても顔が緩んでしまう。

「もう時間だわ。おやすみ、若葉」

「……おやすみ、那美」

第5章

それから毎日昼になると彼女は私の膝の上で眠った。30分近くもじっとしているのは疲れるが、彼女を撫でているとすぐに過ぎてしまう。

ひと月が経つころになると彼女はだんだんとクラスの中でも明るくなってきた。それまでもにこにこ話はしていたが、それも声をかけられたときだけで自分から話すことは全くなく、名前さえ覚えていなかった。うつすらとその無関心を感じていたのか、彼女に接する人はどこかおそろおそろだった。

「ねえ那美さん、美術室一緒にいこう」

「ええ」

それが今ではみんなと連れ立って行動し、休み時間は談笑に加わっている。

私が彼女の変化に一役買っていることは誇らしくて、相変わらず一番の親友であることは嬉しかった。

けれど。

この落ち着かない気分はなんだろう。

私は彼女の髪を撫でている。

柔らかくて長い栗色の髪を。

やりすぎると髪が痛むので、ゆっくりと、そっと。

その寝顔は世界でたったひとつの無邪気なものに見える。

この顔を間近でみることが許されているのは私だけ。

こんな顔をさせることができるのも私だけ。

それは幸せなことなはずだ。

でも……。

ぼうつとしていると気づかずに手を止め、彼女の顔をみつめていた。

桜色の唇。

それはたしかにあのときくちづけた唇だ。

こんなに優しく触れるものがあるとは知らなかった。

あんなに慌てた瞬間でも私はたしかに幸せだった。

そういえば、彼女はキスを気にしたそぶりもみせなかった。

それは……………寂しい。

そうだ、寂しいんだ。

変だ、それは。

どうして寂しいんだろう。

「若葉、行こう」

すっかり冬らしくなったある水曜日に、彼女はまくらと肩掛けを片手に抱えて私の手をつかんだ。

その手を、私は振り払った。

「若葉……………」

「私、もう嫌」

彼女の顔が悲しそうな色に染まる。

予想外の言葉にすっかりおろおろしていた。

「若葉……………」

「もうこんなこと止めよう」

「ねえ、私、なにかした？ 嫌われるようなことした？」

目にうつすら涙さえ浮かべている。弱みを握っているのは、そっちなのに。

「お昼寝なら、ひとりですて」

そういつて背中を向けた。どこに行くわけでもないけど、彼女から離れたかった。

午後の授業が始まって、決して彼女の方を見なかった。

どうして突然あんなことをしたのか、自分でも分からない。ただ無性に寂しくて、気づけば彼女の手を払っていた。

けれど寂しさは消えるどころかどんどん大きくなっていく。

彼女の髪が撫でたかった。

彼女はいつたいてうしてあそこまでお昼寝にこだわるのだらう。
どうして泣きそうになるほど私が必要なのだらう。

彼女のことを何も知らなかった。

私は、次の日学校を休んだ。その次の日も仮病をつかった。
ずっと布団のなかにいるのに、一睡もできなかった。

第6章

土曜日になった。

仮病をさすがに見破られ、私は車で学校へと送られた。

父は成績などにはうるさくないが、義務には厳しい人だった。

親に監視されながら学校へいく恥ずかしさと、彼女に会わなければならぬ気まずさで足は重かった。

教室の扉を開けると、仲のいい友達の小春さんが席を立て、急いでこちらへやってきた。

「おはよう……」

「那美さんとけんかしたの？」

彼女の話によると、那美の様子がここ数日おかしかったそうだ。眠らないのだ。

お昼になると図書室のソファでうつむいたままじっとしていて、教室に帰ってもずっと元気がない。

誰かが話しかけても心ここにあらずで、あやふやな答えしか返さない。

「彼女はどこにいるの」

「それが朝登校するのは見かけたんだけど、教室には来ていなくて保健室で休んでるのかも」

そうじゃない、彼女は薬の臭いが嫌いだ。古い本の匂いは平気なくせに。

「どこいくの」

「ごめん、探してくる」

「ホームルーム始まるよ」

クラスメートの声を背に、私は走りだしていた。

図書室の鍵はあいていた。土曜日は中からいつも鍵をかけていたはずなのに。

そつと扉を開けて部屋へと入る。

奥から、声が聞こえた。

「う……うう……うう」

それはすすり泣きの声だった。

胸が締めつけられるように苦しい。

ひとつ、ふたつ、みつつ目の棚、その奥。

棚の奥には、お姫様がいた。

ただしその姫はこんこんと眠るかわりに、涙をぼろぼろとこぼしている。

ブレザーのそではすっかり色が変わっていて、それでも涙は尽きそうになかった。

「那美」

はつとした表情でこちらをむく。部屋に誰かが入ってくるのさえ気づかなかったようだ。

「若葉」

ぐずぐずの顔に笑みが浮かぼうとしたが、またすぐに消えた。

「若葉、私のこと嫌いになったんでしょ」

私が駆け寄ると、彼女はびくりと体を震わせた。

「違うの、そうじゃないの」

いやいやをするように首を振る。

「だって、嫌だって。私、若葉が本当に嫌なら、あんなことさせない。私、知らないでつきまとしてわがままばかり。嫌いでしょ、こんなひと」

嫌い。そうじゃない、だって私は……。

「私は、那美が好きなの」

涙で潤んだ瞳がじつとわたしを見た。

抑えきれないしゃくりあげが静かな部屋に響く。

「どういうこと……」

「私、おかしい。那美にキスしたいの。那美がああキスのこと気にしてないのが、寂しくてしかたがないの」

そういうと、何も言えなくなってしまった。

涙を制服でぬぐうと、那美はじつとなにか考えているようだった。

「……そうなの」

気持ちの悪いやつだと嫌われてしまう。でも、誤解のまま友情が終わるのは辛かった。

ぽつりと、呟きが聞こえた。

「若葉ならいいよ」

「へ？」

まじまじと見た私に、顔を赤くして彼女はそっぽを向いた。

「若葉がおかしければ私も変なの。若葉なら、かまわなかったの。気にしてないわけ、ないじゃない。ファーストキスだよ。ほっぺにするキスシーンさえ断ったんだから」

ファーストキスという響きにかつと顔が熱くなったが、なにか聞きなれない単語があったような。

「キスシーン？」

なにかに納得したような顔をみせる彼女。

「ここ座って」

そういつて隣を指す。立ち尽くしていた私は、少しためらったあと席についた。

長い沈黙があつて、つかえていたものを吐き出すように、話がはじまった。

「この学校にくるまで、小さい頃からずっと芝居とかモデルの仕事をやっていたの。母親が芸能界とかだーい好きで、私がそれなりに何でもこなせるからけっこう売れっ子だったのよ」

だから好きでもない芸能界に詳しくったのか。

「でも、あの仕事楽じゃない。子どもは何時以降は働けない決まりがあるけど、レッスンや舞台の稽古もあつたし、帰りは12時過ぎることもあつた。舞台のセリフを覚えなきゃいけないときなんて、夜眠れなくて。それで……」

「それで」

「全部やめちゃった。中学に入るのと一緒にすっぱり縁を切ったわ。ようやくテレビの仕事が入りはじめてだから、母親が嘆くことといったら」

その潔さはいかにも彼女らしくて、ふふと声を出して笑ってしまふ。

彼女は私の肩に頭をこつんともたせかけた。

「私、小さい頃からおなかいっぱいお昼寝するのが夢だったの。だからここで眠ることにしたのよ」

なぜ彼女があそこまでお昼寝に執着するのかがようやく分かった。「どうして人をまくらにしようなんて考えたの」

声のトーンが落ちて、私の左手が握られた。

「ときどき、嫌な夢をみるの。あんなに短い時間なのに。夢の中で舞台の上で延々とセリフがでてこない場面とか、着せ替えられては写真が撮られるのを繰り返したりとか、ずっと発声練習をさせられたりとか」

辛いことを辛いと言えないのは悲しかったのだろう。まして、彼女は才能があつてきれいだったから、途中でやめさせようという人がいなかった。

「目が覚めたとき、誰かがいればいいなって思ってた。うなされて目が覚めたとき、何度かあなたを見てたの。棚の向こうからちらちらと、悪いことをしている子供みたいにこつちを見ていた若葉を」
「そんな恥ずかしい姿を気づかれていたなんて、思いもしなかった。それで、キスされて目が覚めたとき、これはチャンスだと。この子なら大丈夫。おどおどしてるし軽く脅せば断られることもないだろうって」

こんどはこちらから、こつんと頭をぶつけてやった。耳の辺りが当たってちよつと痛い。

そんな私の様子にくすくすと彼女は笑い、その揺れが私に伝わった。

「でもね、若葉は私のわがまま許してくれる気がしたの」
安心してきつた様子で肩に体を預けてくる。

「若葉に撫でられながら眠ると、いつも素敵な夢をみて。公園でね、手をつないで、歩くの。春真っ盛りの、きれいな緑の木の下で、私笑ってるの。隣にはいつも若葉がいて……」

声が、途切れ途切れになっていく。泣いたのと、自分の事を話したのとで疲れたのだろう。ひょっとしたら私のように寝ていないのかもしれない。

いつしか、いくつもの楽しい夢の話はすやすやという寝息に変わっていた。私も安心したせいで、丸二日分の寝不足が襲ってきた。

「おやすみ、那美」

ふたりで寄りかかりながら、私たちはぐっすり眠った。

終章、もしくは姫と王子の幸せな眠り

目が覚めたときにはもう1時になっていて、ふたりは先生に見つかからないようこっそりと学校を抜け出した。教室に小春さんとクラスの親しい友達数人が残っていて、仲直りしたことを喜んでくれた。帰り道、別れたくなくて駅前をぶらぶら散策していると、急に彼女が髪のことを言ってきた。

「若葉、その髪型かっこわるいよ」

考えてみれば今朝シャワーを浴びたら時間がなくなって、湿り気が少しのこったまま登校した。ごわごわしていて、中途半端な長さがよいにおかしく映った。

「私もそう思う。ちゃんと乾かしてくればよかった」

「じゃあいつそ切りにいかない」

彼女の案内で訪れたのは、全体を黒と白と鏡で構成されたやたらとシックなヘアサロンだった。

彼女が顔なじみらしきひげをきっちり整えたおじさんになにやら話すと、何もいえないまま手際よくカットされて、気がつけば活発そうなショートカットに変わっていた。

「これ、切りすぎじゃない」

立ち寄った雑貨屋の丸い鏡の前で、何度も髪型をながめる。

「いいのよそれで。だって、みんな私のこと姫とか呼んでたんですよ。それなら若葉は王子様じゃないと」

髪型の注文は王子様っぽくだ、ぜったい。

「地味で真面目でとおってる私が王子様は無理があるような」

「あら、そんなことないわよ」

一緒に覗き込みながら、鏡の中の私の顔を指さす。

「人の顔がどんな風に育つか見分けるの得意なのよ。いろんな顔をみてたからね。ほら、目は切れ長で大きいし、鼻が高くて鼻筋もき

れい。輪郭が丸めなせいで目立たないけど、5年もしたらりりしい美人になるわ」

「そ、そうかな。わあ、毛先がすごいきれい。高いんじゃない」

「気にしないで。私の注文どおりに勝手にやったんだから、払うのは私。働いたお金は少しなら使わせてもらえるし」

けれど、そんなお金をなにもせず使わせてもらうのは申し訳がなかった。

きよろきよろとあたりを見回すと、雑貨屋らしくいい物が見つかった。

「かわりにプレゼントさせてよ」

「プレゼント？」

手に取ったのはピンクの薔薇とそのつばみをあしらった、小さな髪留めだった。

「那美の長い髪に似合うと思うの、どうかな」

彼女は手のひらの髪留めをちらちら見ながら、困っているようだった。

「でも、いいの？」

「私が似合うとおもってからプレゼントするの」

そういつてさっさと会計を済ませると、ファンシーな紙袋を手渡した。

「……大切にする」

どうやら、気に入ってくれたみたいだ。

なぜか次に彼女が向かったのは駅前の大型スーパーだった。

買ったのは、パジャマ、下着、歯ブラシ、などなど。

「もしかして……」

につこりとうなずく彼女

「今日、泊めて。さっき髪を切ってもらってる間に親に許可はもらってあるから」

あいかわらず、彼女は強引なのだ。その場で家に電話をかけると、

さんざんサボりを謝り倒したうえでお許しをもらった。

彼女の演技力は大したものだった。

うちの両親にけんかをしていただけ話すと、あわれっぽく一緒に謝ったり、必要以上に仲良くふるまったりしてすっかり納得させてしまった。その上、私までおとがめなしになるだなんて。

夕食時には家族ともすっかり打ち解けて、お父さんの機嫌もなおっていた。

「お風呂いっしょに入りたかったな」

鏡の前で髪を束ねながら、彼女がつぶやいた。

私は飲んでいた水が気管にはいつてひどくむせることになった。

「ごほっ……こんな歳でそれ、変じゃない」

彼女は私の反応をみて楽しそうに笑っている。

「あはは、変じゃないわよきつと」

「じゃあまた今度」

そう答えるとまた彼女は笑った。

「もう、布団敷くからどいて」

「私の分ならいらないわ」

「へ？」

「一緒に寝るから」

それを聞いたときの私はきつとすごい間抜け面だったんだろう。

なにしろ彼女がおなかを抱えて涙がにじむほど笑い転げていたのだから。

「ああもう、若葉かわいい。ほらこっちきて。あなたのせいですっかり睡眠不足なんだから」

彼女に腕をひっぱられ、私たちはベッドで向かい合わせに寝転がった。

「そういえばさ」

「ええ」

「あの図書室の鍵を使わせてもらっ条件ってなんだったの」

「私のサイン。校長先生のお孫さんがファンだったらしくて」

彼女は本当に有名だったんだ。先生たちが病気を信じてしまったのも、きつと急に活動をやめたせいだ。

「じゃあ学校みんなは那美が芸能人だったって知ってるの」

にやにやと意地の悪そうな笑みを浮かべる彼女。

「みーんな、知ってたわ。女の子ならだれでも知ってるような雑誌に出ていたんだもの。男子だって女子からちゃんと聞いていたわよ」
なるほど、女子ならみんな知っているから教え合う必要はなかったわけだ。私はひとり本の虫をしていて、とことんそっちに疎かった。

「そっか、そうだったんだ」

それを聞いて気づいた。みんなが彼女を見にきていたのは、芸能人の不思議な行動がものめずらしかっただけだったのだ。あれほどみんなに人気があったのもそのせいだ。

彼女の美しさばかりに心を奪われていたのは、最初からずっと、私だけ。

くすくすと笑い声が漏れてしまい、彼女がこれを聞きとがめる。

「なにがおかしいの」

「なんでもない」

どうして笑うのか白状させようとするが、私はなにも答えなかった。どんなに聞かれても、これは誰にも教えない。

しばらくして諦めた不満顔の彼女は、すぐまたなにかを思いついたようにいたずらっぽく笑った。

「そういえば、私にキスがしたいんだよね」

「……うん」

「じゃあ、はい。おやすみのキス。王子様からどうぞ」

目をつぶると、顔をぐつとこちらに近づけてくる。

桜色の小さな唇。

それをまのあたりにしてしまうと、すっかり緊張して体が動かなかった。

「ほら、早く」

私は、意を決するとゆつくりと顔を近づけて。さっと、かするようなキスをした。

きょとんとした顔で彼女はこちらをみる。

「それだけでいいの」

「……またあとで」

今度はまた、彼女がくすぐすと笑った。

「もう、私のこと笑いすぎ」

向かい合っているのが恥ずかしくなつて、あお向けになる。枕元のリモコンをとると、電気を消した。

「ごめんごめん、許して」

「じゃあ許したげる」

ふたり分の笑い声が響く。

彼女は私のおなかに手をまわすと、もう片方の手は右手に絡めた。「やってみたかったの、若葉の抱きまくら」

彼女の体は本当に、柔らかくて、あたたかくて、いい匂いがした。ドキドキはしたけれど、不思議と安心する。

「……おやすみなさい、若葉」

しばらくすると、耳元で安らかな呼吸が聞こえた。涼しくなった首筋に、寝息が少しくすぐつたい。

「おやすみ、那美」

ふたりは、深くて優しい眠りの中に落ちていった。

終章、もしくは姫と王子の幸せな眠り（後書き）

「こうして、王子様とお姫様は幸せな眠りについたのでした」
と終わろうかと思いましたが、しつこいのでサブタイトルに付け足してみました。

最初の文体が気に入ってくれた方には申し訳ないのですが、それをぶち壊すことでお話を動かすようにしたためこういう感じになりました。作者はもともポエム書きを自称しており、文章で遊びすぎてあちこち読みにくかったかも……。

しばらく長い話は書けません、ここが良かった・悪かったという感想がいただければ次の励みになります。よろしく願います。
ここまで読んでくれた方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1875d/>

眠り姫

2010年10月8日13時38分発行